

機関番号：32503
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008 ～ 2010
 課題番号：20700485
 研究課題名（和文） 子どものこころと体の「規律心」を育むラグビー体験に関する実証的研究
 研究課題名（英文） Empirical Study on Rugby Experience of Bringing Up 'Rule Mind' of Child' s Mind and Body
 研究代表者
 森田 啓（MORITA HIRAKU）
 千葉工業大学・工学部・准教授
 研究者番号：80337708

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、子どものこころと体の「規律心」を形成するラグビー体験の効果について実証的に検討することである。得られた主な知見は以下の通りである。ラグビー経験者は非経験者と比較して、①スポーツ場を具体的に想定できて自分の行動の予測ができる、②スポーツ場面と日常の場面の区別が明確にできるようになる、③スポーツ場面において、侮辱的行為に対して攻撃的反応をしやすい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to empirically the effect of rugby experiences which shape well-disciplined children both mentally and physically. The main information obtained is as follows. Compared to the inexperienced people, those who have experienced rugby, 1) can assume situations in sports more concretely and predict their own behavior, 2) can distinguish situations in sports from those in daily life more clearly, and 3) react more aggressively in sports once faced with offensive behaviors.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：規律心、ラグビー、人格形成、身体活動

1. 研究開始当初の背景

(1) 問題の所在

「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」（中教審答申）では、昨今の青少年の意欲、体力、社会性等の低下について問題が懸念され、その対策が提案されている。また「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」（中教審、平成 19 年 9 月 4 日）の「今後の体育科における課題、改善の方向性」では、「生きる力」の基盤である心と体の一体性を重視するとともに、体育を通じて、体力

向上はもとより、知的・情緒的発達や、集団的活動などを通じたコミュニケーション能力育成に果たす役割が指摘されている。現代の「豊かな社会」における人間力および社会性の低下、特に無軌道な「自由」と「個性」を律する上での「規律心」の育成の涵養に向けて、体育・スポーツの果たす役割に大きな期待が寄せられている。

また、池田（1963）は「自由と規律」において、英国パブリック・スクールにおけるラグビー教育の一端に触れながら、個々が全体

の役割を担い、かつ危険が伴う場面において、厳格な規律心の形成こそが、全体としての振る舞いにおける「自由」および「個性」につながる、と解いている。これはわが国の教育や子育てが抱える諸般の問題における方向性を提示するものと捉えられる。上述した「ラグビー体験」が幼少年期の子ども的人格形成、「規律心」の形成にいかなる影響を及ぼすのか解明が期待される。

青少年における「規律心」の育成においては、こころと体がぶつかり合う身体活動を通じて個人内でも対人関係でも体験される「感情」に注目することが求められる。特に「否定的な感情」(巖谷、2001)が重要である。「否定的な感情」を抑制できない「規律心」の低下の背景として、子どもの遊びにおける変化が指摘される。「リアル」(直接的具体的体験)から「ヴァーチャル」(仮想現実)への移行である。自然体験、社会体験、生活体験はもとより、特に危険性を伴う活動や、身体接触を伴う遊びが減少している。「安全」は現在の社会では重要なことだが、規律心を支えるのは感情である。しかも「痛い」「嫌だ」「かわいそう」等、否定的な感情といかに向き合うかが重要といえる。これら感情の制御が社会性の構成要素である他者理解・共感性の第一歩と考えられる。本来であれば、身体接触を伴う伝承遊び等を地域社会の中などで復活させるのが望ましいが現状では困難である。

(2) 先行研究

「規律心」に関する体育・スポーツ領域における研究動向を概観すると、米国を中心に児童期の身体活動と道徳性の発達について1980年代から頻繁に行なわれてきた(Bredemeierら、1995、2007; Weissら、2005)。これらの研究ではPiaget理論を発達させたKohlberg理論、さらにそれを批判的に拡張したGilligan、Damon、Eisenbergらの説を援用している。先行研究では、特にコンタクト・スポーツ場面における善悪および反則行為の道徳的な判断の発達について、スポーツ経験および仲間、家庭や指導者の影響を総合的に検討してきた。その主要な知見は、1) 加齢とともに道徳的判断は発達するが、スポーツ等の課外活動体験の果たす役割は大きいこと、2) スポーツ場面では結果や勝敗を重視するとき、ルールの逸脱や反則が疑われる行為が許容される傾向が認められること、3) 体育・スポーツを通じての健全な道徳的発達には、勝敗のみに拘泥するのではなく、スポーツマンとしてあるべき姿を形成するため、家庭や学校、指導者が連携して子どもの指導に当たることが重要、とまとめられる。今後の課題として、スポーツ場面で得られた知見を踏まえ、例えば学校体育における身体活動を通じて広く児童一般の道徳性の涵養

を促すための効果的な運動プログラム(学習教材)開発などが求められている。

(3) これまでの研究成果

本研究者は、「キレル子どもを抑制するための教育プログラム開発」(平成16-18年度科研費基盤C)において、上述した道徳性の発達理論を基礎に、身体接触を伴う身体活動(幼少年期のラグビー)について質問紙を用いて横断的および縦断的研究を行った。これまでに得られた成果をまとめると、指導スタイル要因の違いに着目した研究では、スポーツ競技(勝敗・優劣)を指向するクラブの子ども群は、運動遊び(活動自体に目的)を指向する群と比べて、(1)年齢が上がるほど、運動への自信度の得点が低くなる、(2)身体接触場面やラフ・プレイ場面における否定的感情が高い、モラル判断の得点が低い、との結果を得た。幼少年期のラグビー参加者において、発達年代および所属するチームの指導スタイルは、否定的感情と非常に高い関連性を持っていた。従って指導者やコーチの係わり方は、負の事態における否定的感情の表出と対処に影響がある。今後の課題として、幼少年期のラグビー体験を通じた道徳性形成において、仲間、家族、コーチ、地域社会がいかに連携して取り組むかについて包括的検討が必要と指摘した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子どものこころと体の「規律心」を形成するラグビー体験の効果について実証的に検討することである。特に、幼少年期の身体接触を伴うラグビー経験者と非経験者の違いについて考察することで、日頃の身体接触経験の道徳性、規律心の育成にどのように関係するかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

この目的を解決するため、平成20年度から22年度の3カ年にわたり、茨城県および千葉県の幼少年期の児童から中学生を対象とし、質問紙を用いた調査を実施した。ラグビー経験者と未経験者を比較し、身体接触経験による規律心の基礎となるデータを収集、考察した。

4. 研究成果

以下に、ラグビー経験者と未経験者を比較した研究成果を示す。調査は2010年4月から12月において、ラグビー経験者406人、未経験者198人を対象に実施した。調査項目は、①プロフィール、②プレー中に湧き起こる否定的な気持ちについて、③プレー中に湧き起こる復讐心について、④日常生活における身体接触について実施した。

以下に、各項目の代表的質問とその回答結果、および考察を示す。

①プロフィール：身体活動を伴うスポーツに対する自信

	自信がある	どちらでもない	自信がない	無回答
ラグビー	58.2%	28.3%	5.6%	7.9%
未経験者	42.9%	45.5%	11.1%	0.5%

身体活動を伴うスポーツに対する自信については、一般児童では、「どちらでもない」との回答が45.5% (90人)と最も多くなっているが、「自信がある」との回答も42.9% (85人)となっている。一方ラグビー経験者では「自信がある」という回答が58.2% (237人)と優位に割合が高くなっている。やはり日常的にラグビーというスポーツに取り組んでいる児童の方が、一般児童よりもスポーツ活動に対して自信をもっていることがわかる。

②プレー中の否定的な気持ちについて

(1) 体の大きい相手とぶつかる状況(「いやだ」と思う)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	41.4	17.7	19.2	12.6	8.1	1.0
Y	22.7	18.7	28.8	15.2	14.1	0.5

X：ラグビー経験者、Y：ラグビー未経験者
A：思わない、B：やや思わない、C：どちらともいえない、D：やや思う、E：思う、F：無回答(以下同)

(2) 体の大きい相手とぶつかる状況(「にげたい」と思う)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	51.5	19.5	12.8	8.1	5.9	1.5
Y	30.3	26.8	24.2	9.6	8.6	0.5

(3) 体の大きい相手とぶつかる状況(「逃げずにぶつかっていい」と思う)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	13.0	17.0	20.9	21.7	26.4	1.0
Y	13.6	18.2	29.8	20.7	17.7	0.0

(1)～(3)：からだが大きくて強い人とぶつからなければならぬ状況を想定させ、その状況に対して懐きうる感情やその時の自分の行動の予測を問うた設問では、否定的感情に対する回答にばらつきはあるが、ラグビー経験者では否定的感情はあるものの「嫌だ」という「嫌悪感」はないことがわかる。また、「逃げたい」と思うかという質問に対しては、一般児童よりもラグビー経験者の方がはっきりと否定する率が高くなっている。「逃げずにぶつかっていい」というより積極的な態度は、一般児童では「どちらとも言えない」という回答が最も多い29.8%

となっているのに対して、ラグビー経験者では「とてもそう思う」が最も多く26.4%と、優位に異なる結果が得られている。

この結果より、ラグビー経験者の方が身体接触を伴うスポーツシーンをより具体的に想定でき、その状況における自分の行動の予測や判断ができていていると考えられる。

(4) 体の大きい相手とぶつかって倒された状況(「いやだ」と思う)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	36.7	19.7	15.0	16.3	11.1	1.0
Y	15.2	19.2	32.8	17.2	15.1	0.5

(5) 体の大きい相手とぶつかって倒された状況(「頭がかつとす」と思う)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	37.2	14.5	17.0	15.5	11.3	4.0
Y	25.3	18.7	32.8	12.1	7.6	3.5

(6) 体の大きい相手とぶつかって倒された状況(「次は(ステップで)よけよう」と思う)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	19.7	11.6	19.0	21.2	26.8	1.7
Y	23.7	19.2	30.3	14.7	11.6	0.5

(7) 体の大きい相手とぶつかって倒された状況(「人とぶつかる運動だから倒されても仕方がない」と思う)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	14.3	8.4	13.3	23.1	37.9	3.0
Y	10.1	11.1	20.7	34.9	20.2	3.0

(8) 体の大きい相手とぶつかって倒された状況(「ケガをしない範囲であれば、人とぶつかることは楽しいと思う)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	12.6	11.8	22.4	19.5	32.3	1.4
Y	15.7	19.7	31.8	14.7	18.1	0

(4)～(8)：次に、実際に自分が被害者になったケースを想定させた。この場合にも、「いやだ」という否定的感情については未経験者では回答がばらついてはいるが、ラグビー経験者では「まったくそうは思わない」という回答が最も多く36.7%となっている。これはスポーツのプレー中に起こった不可避な出来事であり、「しかたがない」と許容できる範囲のことで、「いやだ」と嫌悪するような行為ではないという判断であると考えられる。こうしたスポーツのプレー中の出来事であるという認識は、「あたまがかつとす」と思うかを問うた回答にも現れており、未経験者では、「どちらともいえない」という明確な判断ができない回答が多くな

っている(32.8%)が、経験者では「まったくそう思わない」という回答が多くなっている(37.2%)。また「次からよけよう」と思うかという質問でも、未経験者は、「どちらともいえない」という明確な判断ができない回答が多くなっている(30.3%)が、経験者では「次からはステップでかわそう」と思うという回答が最も多くなっている(26.8%)。実際のプレーを想定して、回避する行動を取ろうというプレーヤー心理が働いているものと思われる。「人とぶつかる運動だから倒されてもしかたない」と思うかという質問に対して、未経験者では「どちらかといえばそう思う」が34.9%と最も多くなっているが、経験者では「とてもそう思う」がもっとも多く37.9%となり、スポーツのプレー中の不可避な出来事であるという認識がきちんとできていることがわかる。また、や「けがをしない範囲であれば、人とぶつかることは楽しい」と思うかという質問では、未経験者では「どちらとも言えない」が最も多く31.8%となっているが、経験者では「とてもそう思う」が、最も多く32.3%となっている。

ラグビーの身体接触を伴うスポーツを経験することで、日常生活とスポーツのプレー中という非日常の区別がきちんとでき、その状況を楽しみと感じられるようになっていくと推察される。

③プレー中に起こる復讐心について

(1)相手に嘲笑された場合(「やり返そう」と思うか)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	17.7	7.7	18.2	19.2	36.2	0.5%
Y	18.2	13.6	26.8	18.2	21.7	1.5

身体接触の際に相手に侮辱されたケースを想定させ質問に対する回答では、未経験者でも経験者でも侮辱されたと感じた場合の応答はほぼ共通していたが、攻撃的な反応である「やりかえそう」とは思うかに対する回答では、未経験者では「どちらとも言えない」との回答が26.8%と最多なのに対し、ラグビー経験者は「とてもそう思う」が36.2%と最多となっている。本来は侮辱的行為に対しても報復的な行動を取らないのが冷静な判断であるが、自身の否定的感情の解消方法として「やり返す」という行動に出してしまう可能性が高いことが伺われる。スポーツのプレー中であったとしても、侮辱的行為に対しては、はっきりと反発する気持ちになり、一般児童よりもむしろスポーツ経験がある児童の方がより攻撃的な反応をする可能性が高いことが示唆された。

③プレー中に起こる復讐心について

(2)仲間がけがをしてしまった場合(「や

り返そう」と思うか)(%)

	A	B	C	D	E	F
X	25.9	15.0	16.8	19.7	20.4	2.2
Y	23.8	20.2	28.8	12.6	13.1	1.5

他人が被害を被ったケースを想定させた場合、多くの質問で未経験者と経験者の回答の傾向は同じであったが、「やりかえそう」とは思うかという質問に対しては、未経験者は「どちらとも言えない」(28.8%)が最も多くなっているが、経験者では「まったくそう思わない」が25.9%、「とてもそう思う」が20.4%と意見が二分されている。未経験者にとっては自分が被害者というわけでもなく、なかなか想定しにくいケースで判断ができないという回答になっているが、経験者にとっては比較的経験しているケースであり、個々の意見の違いが回答の違いにはっきり現れているものと思われる。また前述したように「人とぶつかる運動だからけがをしてしまうこともある」と思うかという質問では、未経験者では「どちらとも言えない」が最も多く(32.3%)となっているが、ラグビー経験者では「とてもそう思う」という回答が32.0%と最も多くなっている。

ここでもラグビー経験者の方が日常生活とスポーツのプレー中という非日常の区別が明確にできていることが伺える。

④日常生活における身体接触について

日常生活での「身体接触を伴う活動」の状況についての質問では、未経験者と経験者の間で明確な違いはなかったが、日常生活の中ではラグビー経験者の方が身体接触の機会が少ない傾向がある。ただ、身体接触に関する嫌悪感が少ないので、初対面の相手に対する拒絶反応はやや弱くなっているものと考えられる。

本研究は、幼少年期のラグビー体験が子どもの「規律心」の形成にいかなる影響を及ぼすかを調査した。ラグビー経験者とそれ以外の児童に対して他者と身体接触を伴う活動を行う際に生じる「感情」に着目してアンケート調査を実施した。身体接触を伴うスポーツ活動経験は、他者との身体接触に対する否定的感情を減少させる。日常生活では、ラグビー経験者の方が身体接触経験は少ない傾向が見られた。身体接触に対する嫌悪感が少ないためか、初対面の相手に対しても拒絶反応は少ない特徴がある。今後はこれらの良い点を教育に活かすより具体的方法について考察したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 森田啓、体育・スポーツにおける「負の引き受け」：新しい体育・スポーツの可能性、体育・スポーツ哲学研究、査読有、第32巻第2号、pp. 69-81. 2010.
- ② 森田啓、子どものこころと体の「規律心」を育むラグビー体験に関する実証的研究、千葉工業大学プロジェクト研究年報2010年、査読無、第7号、pp. 157-158. 2010.
- ③ 引原有輝、渡邊将司、森田啓、林容市、西林賢武、体力レベルならびにスポーツクラブ所属の有無からみた中学生・高校生の意欲関心と生活習慣、千葉工業大学研究報告人文編、査読無、第47巻、pp. 39-46. 2010.

〔学会発表〕(計4件)

- ① 森田啓、新自由主義を変える体育の可能性、日本体育学会第61回大会、中京大学、2010年9月10日.
- ② 森田啓、現代社会におけるスポーツ世界の位置づけ：新自由主義とスポーツ、日本体育・スポーツ哲学会第32回大会、新潟大学、2010年8月22日.
- ③ 森田啓、身体接触経験と道徳性の育成に関する研究：ラグビーを事例に、日本スポーツ教育学会第29回大会、長崎大学、2009年11月7日.
- ④ 森田啓、体育における負の引き受け：死と体育、日本体育・スポーツ哲学会第31回大会、北海道教育大学旭川校、2009年9月6日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 啓 (MORITA HIRAKU)
千葉工業大学・工学部・准教授
研究者番号：80337708